

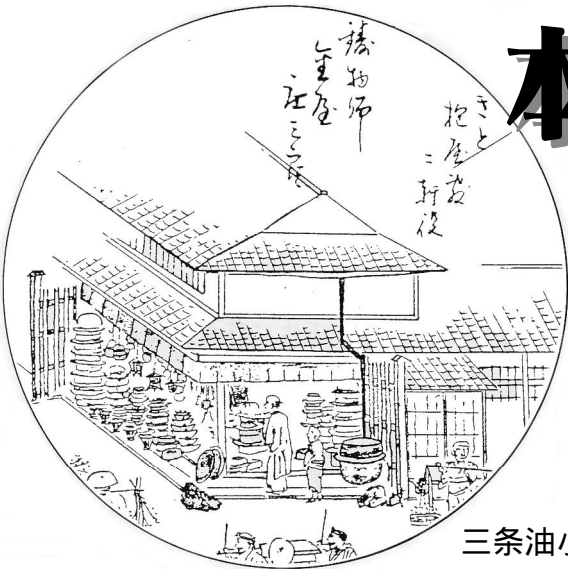
本能まちづくりニュース

第46号 平成20年10月1日発行

本能まちづくり委員会
委員長 西嶋直和

E-mail: post@honnoh.net
URL http://www.honnoh.net

本能まちづくりニュースのカラー版は、ホームページでご覧ください。



三油小路町絵図より鋳物師釜屋庄三郎方

三条通の祇園祭

7月24日祇園祭の還幸祭では、三若(中御座)四若(東御座)錦(西御座)の三基の御神輿が三条通を通過、八坂神社に帰られます。三油小路角の木村ガレージで、



今年は三基が休憩されるというので、三油町の有志の方々がお接待されるのに、まちづくり委員会のメンバーもお手伝いに駆けつけました。そして軒先にカラフルな本能のれんの華を掛け、御神輿をお迎えしました。夜8時30分ごろ三若が到着。

担ぎ手の皆さんは、台車をはずして、御神輿を担ぎ、振り、差し上げられ、「ホイット、ホイット」と凄く迫力でした。三若が行かれてから、しばらく遅れて四若と錦が続いて来られ、三条通に留まれた時は、三条通が白い半被でうずまり、担ぎ手さん達の熱気で壮観でした。今年も悪い疫病が流行らぬよう、祈願しました。



ところで、三条通の堀川から新町までの地域では、2000年に「三条通を考えよう会」を結成され、祇園祭と「歩いて暮らせるまちづくり」のまちなかを歩く日には趣向を凝らした「もてなし往来三条通」を開催されています。

今年の祇園祭の時期にも、7月14日～16日(宵山)まで写真撮影・展示会、24日(還幸祭)にフォトコンテスト・抽選会・展示会をされました。

写真撮影会は名づけて「ゆかた de 人力車」。会の運営に参加している京都工芸繊維大学佐々木研究室・まちづくりサークルや同志社大学「人力俤友の会」の学生さんの協力で、人力車に乗せてもらって自分のデジカメや携帯で撮影してもらい、その場でデータをパソコンに送りプリントアウト。コメントをつけて展示します。最新機器の便利さに驚きました。普段使いこなせていないことに気がきます。夕暮れ時にも拘らず綺麗に色が出ていました。「人力車は気持ちいい!」と嬉しそうな顔、人力車の動きにちょっと緊張気味な顔、3人も乗って重くて申し訳なさそうな顔、美女揃い、腕白組、いろいろ楽しい写真満載でした。今年は14日・15日が夕立で、開店

休業時は人力車にブルーシートをかけ、スタッフは狭いテントの下、押しくら饅頭で雨宿り。晴れた宵山の16日は前二日分の倍以上のお客さんで大賑わいでした。写真



写真は100枚近くあり、24日に、三条小川角の田中直社屋1階ギャラリーで、一枚ずつカラフルな台紙に貼り、見物客が投票を行うコンテスト。夜9時に、その場に

来られている入賞者に、スタッフ自前の景品が贈られました。祇園祭が初めて、という遠方からの観光客の飛び込みも多いですが、子供・孫の成長の記念に、と地元のご家族が撮影に参加されます。来年の趣向は未定ですが、来られたことのない地元の皆さん、どうぞのぞきにおいでください。



本年のもう一つのメイン企画は「懐かしい三条通写真展示」でした。

スタッフが、町内を一軒一軒回り、古い写真の提供を依頼されました。ありそうでもどこにあるかわからなかったり、やっと見つけても写真機の珍しい時代は人物中心で、まちなみ景観まで写っているものが少なかったりで、苦労されました。しかし、その甲斐あって、18枚もの懐かしい写真を集められました。京都でも珍しくらい立派な岩田蒲團店の石造りのショーウインドウ、(株)林七の瓦葺・虫籠窓のある古い社屋、堀川から油小路まで何基ものスズラン灯と多くの看板が並び繁華街だったことを思わせる三条通橋東詰町、三井銀行のさらに前の十五銀行等の写真や、また、今は80歳くらいの方がまだ赤ちゃんだった頃の店構えの写真、還幸祭の行列を待つ人々の写真などがあり、大正末から昭和初期・中期の情景があらわされていました。

写真はミニすだれに貼って掛けられ、この夜、御神輿を迎えるために三条通沿いに置かれた行灯のほのぼのとした明かりとともに、懐かしい雰囲気をかもし出していました。写真の提供・収集・現像等に尽力されたスタッフの皆様、お疲れ様でございました。

本能ギャラリーで写真展

本能まちづくり委員会では、「三条通を考えよう会」が集められたこの「懐かしい三条通」写真群が貴重な生活資料であり、より多くの皆さんにご覧になってもらいたいため、写真をお借りして、8月23日の本能まつりにおいて、本能ギャラリーに再び展示させていただきました。



立命館大学乾ゼミ4回生の協力で、写真展を案内する立派な立て看板や、各写真のカメラアングルを示す地図を作成しました。当日は雨の時の避難場所にもなったようですが、ギャラリーに来られた方々は「よくこんな写真

があったね」と感心したり、「前はこんなやだったん?」「昔、ここに同級生が住んでいて遊んだ」とか、「この建物の雰囲気は覚えている」とか、興味深げに見入り、話し合っておられました。



三条通の写真展示をきっかけに、本能まちづくり委員会は本能学区全体で、〈昔、懐かしい〉あの頃の写真を集め、まちの姿や暮らしぶりをたどってみたいと考えております。古い写真や資料がありましたら、是非お貸しください。立命館大学乾ゼミの皆さんの協力を得て、本能の昔に思いを馳せる機会をつくりたいと考えております。(N村)

山田町祇園社例祭

[平成20年7月21日、山田町の村田茂雄様からお寄せいただきました。]



7月20日、37.4度の猛暑の中、八坂神社より神官をお迎えしまして、午前10時より毎年恒例の例祭を、多くの町民の皆様方の御参拝、町役以外の皆様のお手伝い協力があり、つつがなく行うことが出来ました。

八坂神社の祇園社の疫病守護神の牛頭天王ござてんのう(素戔鳴尊 すさのおのみこと)のありがたい掛軸のもと、ひとりひとり玉串を捧げ、町内・町民の安全を祈願しました。



長年にわたって、7月24日と11月3日、年2回行なわれてきましたが、近年より後祭りの24日に近い、日曜日に実施、年1回となりました。

山田町 村田 茂雄

村田さんの投稿の原文・写真は本能まちづくり委員会ホームページに掲載しています。ご覧下さい。

「五山送り火」～先祖を思い、手を合わす～

第6回本能ものしり講座は、7月29日(火)午後7時30分より9時まで本能自治会館1階会議室にて「五山送り火」と題し大文字保存会副理事長・長谷川綉二(はせがわしゅうじ)氏にお話をいただきました。西嶋委員長は「送り火は毎年見せていただくが、いつごろからあるのか、誰が継承されているのかなど知る機会がありませんでした。今日は準備でお忙しい中ではありますが、お盆を前に、とお話をお願いしました」と紹介しました。

長谷川氏は「自身、送り火のことを考え始めたのは代替わりした頃からです。若いときは暑い(熱い)、しんどい、何で毎年せんなんのんか、との思いが大きかったです」と始められ、歴史的推移だけでなくその精神性や現在の運営について1時間半たっぷりとお話くださいました。



8月16日の送り火が現在の型になったのは昭和32年以降。各山の保存会が独自に行っていたものを“観光都市京都”の一環で、一緒に時間を決めて行うようになりました。送り火の始まりは諸説あり①弘法大師のご縁の説②足利将軍の説③近衛信尹(このえのぶただ)の説などですが、お話をされたのは足利将軍の説でした。足利義政が夷子・義尚(よしなお)が幼年で没したことを悲しみ、それを見た相国寺の和尚が「仏は一人(二人としない)」という字をあわせ「大」と掛軸に書き慰めました。しかし軸の中では万人の目に触れぬため家臣が白い布を広げ如意ヶ岳で大の字を示したということです。後に浄土寺(銀閣寺の前にあった)に土着の人々が門火を燃やして御霊を供養していた、その火を山へ持ってあがったの

が送り火となったのでは・・とのこと。江戸時代には「大」がともると子供が河原で松明を持って走り回り大人はそのそばで門火を燃やしていたようです。

五山の送り火は如意ヶ岳「大文字」→「妙法」→「船形」→「左大文字」→「鳥居形」の五つです。妙法は一村改宗で日蓮宗となった村が、船形は西方寺が、左大文字は金閣寺、鳥居は曼荼羅山(愛宕神社一の鳥居が立つ)が主体となっています。大文字は、浄土寺村(現銀閣寺町)の48軒の家が主となり、将軍や寺院など誰の命令を受けることなく、庶民によって続けられてきました。長谷川氏のご先祖は500年ほど前に鎌倉から足利将軍に連れられてこられたそうです。そのご縁で送り火を守っておられます。

48軒で一山を管理し、送り火の用材・松(薪と松葉使用)や小麦(麦藁使用)を作り育てておられます。送り火は一日だけですが、そのために一年中、山のことを考え手入れをされているとのこと。昭和40年ごろまでは長子継承・女人禁制の決まりがあり、その家の長男のみが火床を組み点火する役目を担っていました。次男以下や女子ばかりの家は各家ごと約10束(1回に1束8kgを2束担ぐ)の用材を運ぶ仕事までの参加で、男子のいない家では親戚の男手一同で担っていたのですが、このままでは先細りになるという心配から、15年ほど前から娘さん・ご養子さん・娘婿さんでも、古来より受け継いだことを大切に思い、家督を継がれた方には長子と同じ役割を担ってもらえるように変わっています。ちなみに長谷川氏の家では長子は代々「庄左衛門」を継ぐとのこと。

長谷川さんは長男ではなかったのですが、たまたま18歳のときお兄さんが留守にされていたので火をつけ

る役目が回ってきてデビュー。「すぐ点く」と思っていたのに5分間火がつかず、煙ばかり。後ろから飛んできた役員さんにはじかれて「結局役員さんに火をつけてもらいました。家に帰ったら母に叱られて、御飯なかったです」と。今でこそ石床がありますが以前は地べたに溝を掘って火床を組んでおり、夕方都の風向きを見てから溝



を掘る方向を決めていたとのことです。今でも3時ごろから終わるまで緊張のしっばなしで5分前には誰も口を聞かなくなり、8時に「1,2の3!」で点火するも、モタモタしていると役員さんが飛んで来られるといひます。「家に帰って、今日の火は良かったよ、と言われてやっと思ひが出ます。実際に送り火を見たことはなく、下山してテレビニュースで今年の火のつき方を確認するのみです」とおっしゃっていました。

京都ではお盆になるとまず7日に六道さんで鐘をついて御精霊(おしょうらいさん)をお迎えし、13日~15日にお家でお接待し16日の早朝に川へ流して送り出します。そして16日夜の送り火でふたたび冥土へ帰っていかれるのです。送り火はおしょうらいさんが「大」如意ヶ岳で煙に乗って東の空へあがってゆき→妙法をめざして北の空へながれ→船形で船に乗って(三途の川の船だまり)→左大文字で金閣寺を経て西方へ→鳥居で愛宕神社の鳥居をくぐって冥土へ行くという流れがあるのではないかと長谷川さんは語られます。火の粉は火床へ向かって飛び込んでくるようにみえ、「仏が煙に乗ろうと火の中に入ってくるようです」と、まさに御精霊の冥土への旅立ちの瞬間に見え「ご先祖様に生かされている」思ひを再認識されるそうです。また、天橋立の松枯れの松や、祇園祭りで立てた松(洛中の厄や餓鬼が集められた神木)を引き取って、燃して供養とするなど、「これも御仏の・・・」とのお言葉でした。イベントと思ひて見る人が増えても、点火と共に手を合わせる人が一人でもいる限り必ず火は灯したいと強くおっしゃいました。

京都ではお盆になるとまず7日に六道さんで鐘をついて御精霊(おしょうらいさん)をお迎えし、13日~15日にお家でお接待し16日の早朝に川へ流して送り出します。そして16日夜の送り火でふたたび冥土へ帰っていかれるのです。送り火はおしょうらいさんが「大」如意ヶ岳で煙に乗って東の空へあがってゆき→妙法をめざして北の空へながれ→船形で船に乗って(三途の川の船だまり)→左大文字で金閣寺を経て西方へ→鳥居で愛宕神社の鳥居をくぐって冥土へ行くという流れがあるのではないかと長谷川さんは語られます。火の粉は火床へ向かって飛び込んでくるようにみえ、「仏が煙に乗ろうと火の中に入ってくるようです」と、まさに御精霊の冥土への旅立ちの瞬間に見え「ご先祖様に生かされている」思ひを再認識されるそうです。また、天橋立の松枯れの松や、祇園祭りで立てた松(洛中の厄や餓鬼が集められた神木)を引き取って、燃して供養とするなど、「これも御仏の・・・」とのお言葉でした。イベントと思ひて見る人が増えても、点火と共に手を合わせる人が一人でもいる限り必ず火は灯したいと強くおっしゃいました。

長谷川氏は、この日に合わせて、『京都五山送り火』を大文字保存会より発行されました。五山の起源や火床の構成などの記述や図示がなされてわかりやすく、表紙には、夏の紗袷無双着物をおもわせるような、下の図柄が透けて見える薄紙がつけられている風雅な冊子です。ありがとうございました。(N村)

大文字送り火ボランティア体験記

ものしり講座でお世話になりました大文字送り火保存会・長谷川副理事長のご厚意で、8月16日委員会メンバー10名が割り木や護摩木運びのボランティア活動に参加しました。

私は、地元の小学生なら必ず遠足で訪れるという如意が嶽登山は初体験!「大人の遠足気分で…」と余裕を感じつつ、提灯を掲げた「家」の軒先を歩き、麓の八神社から出発!登山の途中に小雨に降られたおかげで、涼しく快適な登山…のはずでしたが、笑えない程の汗をかきながら到着。それでも市内を見渡す爽快さは達成感いっぱい!

ほっと一息休んだところでボランティア活動が始まります。大の字の中心から字頭までと、右流れの部分のそれぞれの点火地に、約5^{kg}の割り木の束を3~4束と護摩木、20ℓの水の入ったポリタンクをバケツリレーで

運営面では今後の体制のため平成11年に「大文字保存会」としてNPO法人化されたのですが、NPO化により自分たちで山を作って守っていく基本精神が揺らぐ部分もあり「資材集めも、しんどいところもお金やボランティアで何とかならそうしたら・・・」という意見を聞いたりすると、良かれと思ひてしたことが今となっては原点を薄れさせるのではないかという思ひに苛まれているとのこと。基本は山なので今少しづつ山を元の状態に戻しておられます。ご自身はお勤めされていたとき、年60日の有給と週休はすべて大文字のことに費やし「これをやっていくのが家系なので」と思ひておられたそうです。が、時代の変化とともに、役員でも原点は保ちつつ無理のないように、との思ひを若手の方に伝えておられます。またボランティアの方には、ここで感じたことをぜひ自分の地元へ持って帰って伝えてほしいと教えておられます。

2000年の大晦日の送り火では「お迎えもしてないご先祖さんをなんで送るのや」と長老たちと意見が対立したのですが、比叡山の不滅の灯明の灯をもらって点火するならばと若い世代へ任せてもらって冬の「五山送り火」が相成り、それ以来若い学生ボランティアが入って手伝ってくれているそうです。

送り火を続けてゆくのは「ご先祖様に生かされている思ひがあるから」と何度もおっしゃっておられました。「皆さんもせめてお盆にはご先祖様をお参りしてください」と締めくくられました。お話の後「昔より燃えている時間が短いのでは」という質問には「松材の質の関係で時間は短くなっています」と答え、さらに資材確保の難しさなどのお話が続きました。樹齢50年以上でないと火もちが悪いそうです。また消し炭の効用などメディアで伝えられることがイベント的にならないよう自分の言葉で理念を伝えたいと強い思ひを述べられました。

お話が大変興味深く尽きることはないのですが「地域のご苦労や裏話をありがとうございました」と中村副委員長のお礼の言葉となりました。(あ)

送っていきます。ボランティア約60名が繋がっても何度か移動し、急な坂道を右往左往してなんとか準備を終えた頃には、雨も止んで雲の合間の太陽に照らされ、幻想的な空と京の町並みを眺めながら、ほんの少しだけ「送り火」に関わられた一体感を得ていました。

そこからは送り火を代々継承している各ご家族「家」の仕事…割り木・護摩木を組んでいく作業が始まります。当日の風のまわり方を見て、火の勢いや焼け落ちる時間を想定しながら丁寧に組んでいきます。途中で役員の方々が、培われた経験と研ぎ澄まされた勘で組まれた火床を見回っていきます。夕暮れに近づき、私た



ちは長谷川副理事長の案内で字頭の近くへ移動しその瞬間を待ちます。重い消火器具を担いで登山していた消防署員や地元消防団員が加わり、延焼を防ぐ為の放水を行い緊張感は一気に高まります。

点火5分前、懐中電灯や携帯電話の使用を禁止され、緊迫感で誰ひとりとして声を発しなくなった暗闇の静寂の中、それぞれの「家」は声をかけあいます。固唾をのむ瞬間、一年間待っていたその「火」が灯ります。「火」は一気に「火柱」となり、私たちに木を弾く音や大きさ、熱さを通して壮大な存在感を教えます。心と視線を落とすと、現実の町から届くカメラのフラッシュにも圧倒されま



す。荘厳な世界に引き込まれ、自然に手を合わせずにはいられません。

学区情報

雨の本能夏まつり 2008

地蔵盆を催された町内が多い8月23日(土)、本年も「本能夏まつり」が、午後4時半から、本能グラウンドにて開催されました。

当日は、例年とは打って変わってあいにくの雨となり、予定されていたステージでの催しは残念ながら中止となりました。「お客さん、今年は少ないかなー?」「雨は辛いなあ。」といった不安の声も聞こえはじめ、雨脚も強まるスタートとなりました。しかし、屋根の下に避難した抽選会場や、自治会館1階の会議室に移動したゲームコーナーには子供も大人も集まれ、特養グラウンド側テラスに加え、本能館の辻子に並ぶ屋台や出店に、傘をさしながらも多くの方が来られていました!夏まつり抽選券集計結果によると、晴れた昨年の7割強の来場者数でした。

今年の屋台は、夏らしいソースの香りを漂わせた焼きそばやたこ焼き、フランクフルトにポップコーン、焼きとうもろこしなど。おいしそうな匂いにお客様も長蛇の列を成しており、グラウンドに出る通路は、あまりの人の多さに通るのがやっとといった状況で、浴衣姿で大奮闘のスタッフは、一同本当に喜びました。

盆踊りは、グラウンドの櫓のまわりで一時は開催されましたが、降ったり止んだりの天候に、一旦中止となりました。その後、続きは特別養護老人ホームのホールで行われ、子供たちや入居者の方、世話役の方々が踊りのリーダーの方に合わせ、楽しく踊られていました。

夏まつり後半は、次第に雨も止み、浴衣姿も増え、夜



灯し終わると、「家」は鎮火を待たずその責任を置いて下山を始めます。麓の「家」では、一年の責務を終えて戻る主人の帰りを待っています。私たちが消し炭をいただいて、暗闇の中を下山して「家」が待つ本能学区へと帰り、貴重なボランティア体験が終わりました。

一年に一度、数百万人の目が午後8時に一斉に注がれ、それぞれのご先祖様を送るという緊張感は、それぞれの「家」が継承し、時代を越えて、点火した時からまた新たに始まっているのです。

世代をつなぐ責務を担う「家」は、同じ時代を生きる「家」同士が繋がり「まち」を作り歴史を刻む。その「家」の大切さを長谷川副理事長もお話されていてい

の暗さとホールから聞こえる「月が一出た出たあ〜♪」の音頭に、しみじみと夏を感じるお祭りとなりました。雨の中、皆様お疲れ様でした。(S.Y)

「雨にも負けない活気」立命館大学3回生 村田義樹 当日はあいにくの雨だったので、学生は「雨でもお祭りはできるのだろうか?」と心配していました。しかし、いざ始まってみると雨にも負けない地域の方々の活気に驚きました。

まちづくり委員会は焼きそばを担当しており、私たち学生も焼きそば作りのお手伝いをさせてもらったのですが、委員の方々の雨にも負けないハイテンション焼きそば作りに驚きを隠せない学生がチラホラ見えました。

屋外での盆踊りが中止になったのは残念でしたが、私たちにとって忘れられない楽しい思い出になりました。



お知らせ

おいでやす染のまち本能 2008年11月16日(日)開催
16日のみの開催です。絞り体験教室は行いません。詳細は、後日チラシ・ポスターでご案内します。

ひとりごと ◎お話を思い出しつつ今年の送り火ではいつもより深くご先祖様に感謝。(あ)

◎長谷川副理事長様、大変お世話になりました。来年も“リベンジ”させていただきますようよろしくお願い致します(ポニョ足)

◎雨の中、本能夏祭りにご参加くださいましたみなさま、本当にありがとうございました!来年もまた、夏の思い出を作り本能まで足を運んでみてください☆(S.Y)

◎アンケート調査、ならびに本能の昔の写真収集にご協力いただき、誠にありがとうございます(N村)